

KEYWORD

【 山岳診療所 】

標高2000mを超える山々に医師・医学生等がボランティアで開設している診療所。昭和39年に岡山大学学生により創設された北アルプスの診療所には、現在香川大学の学生も加わり運営にあたり、毎年7月中旬から約1カ月間、両大学の医師・OBらと共に登山者の健康管理を行う

白杵尚志

山で知る医療の原点



人

気俳優・向井理が主演した2012年夏のドラマ「サマーレスキュー」天空の診療所」。将来を嘱望された医師が、北アルプスの小さな診療所で、夏を過ごし、人間として成長する姿を描き話題になりました。実は、このドラマのモデルとなったのは、香川大学と岡山大学の学生が運営する山岳診療所。学生たちをまとめる白杵尚志准教授は、ドラマの医事監修を務め、時任二郎演じる人間味溢れる医師のモデルにもなっています。

このドラマの誕生は偶然から。10年、NHKのドキュメンタリー番組が診療所取材。その放送を、テレビ制作会社のスタッフがたまたま見ていて、ドラマ化の運びとなったそうです。「脚本家の方には、台本を書く前に様々な事を聞かれました。ヘリコプターで患者を搬送しようとした時にさらに重症の方が搬送されて来た話、暗い診療所で、小さな窓から差し込んで来た夕日を無影燈がわりに手術をした話など、わたしの体験をドッキングして作られたストーリーもあるんです。医事監修としては、診療所や病院のシーンに不都合な点がないかのチェックも行いました。中心となる医師だけでなく、画面に映るすべての医師や看護師、医学生役の方に適切な動きを指導するのは、思った以上に大変でした(笑)。モデルとなった診療所は、岐阜・長野・

富山の県境、標高2500メートルにあり、健脚の夏でも約10時間の登坂。多くの場合は途中で上泊しないと登れないほど深い山の中にあります。

薬や医療機器が十分ではない山の上では、口と耳と手を使った医師の診断と迅速な判断がすべて。怪我や体調を崩した方を、くすぐりや下での病院へ搬送するのかが、予定通りの山行を許可するのかが、それとも異なったルートで下山させるのか、即座に判断する必要もあります。一般の医療施設のように治療しつつ経過を観ることは許されません。正しい診断のためには、医師としての知識や経験が必要ですが、山では、山道を知っていること、重要な判断材料となります。患者さんがどの道を通ってこまで来たのか、分からないと、症状を正しく把握できませんし、どこへ向かおうとしているかが分からないと、山行の許可は出せません。だから学生には、空いている時間に実際に登山道道を歩いてもらうのだそうです。

時には高山病で生命の危険にさらされる。重症患者を診ることも試みられる。山は、医療人としての力量が試される場でもあります。

山の上の医療は、夏だけ、山の上だけの話ではありません。実は真冬の月、薬剤や医療用品の調達、医師や看護師、学生のスケジュール調整が始まっています。

中でも大変なのは医師の確保。日常診療で忙しい医師たちに連絡を取り、夏の診療所に医師のいない日が1日もないよう細かなスケジュール調整を続けます。また開設中は地元で連絡係を置き、診療所に不足品があれば調達、次に入山するチームに荷揚げを託します。山行中は連絡が取れなくなる班口連の安全を確認、把握するのも連絡係の重要な役割です。「冬から準備を始め、夏は山での医療を経験する中で、学生たちは大きく成長します。責任は大きいですが、その分ご褒美のように楽しいこともあります。雑人なアルプスの自然は素晴らしいです。夜に山小屋で酒を酌み交わしながら人生や医療について語をするのも、なかなかいいものです。」

ところで白杵准教授、ドラマで主演した向井理さんとお話はされましたか？「ほぼ毎週、1〜3日は、一緒に仕事をしていますからね。演技の中で、手技としての医学的な意味についてよく尋ねられましたよ。かな、専門的な質問もありましたので、よく勉強しているんだなと、驚きました。現実には、テレビのように劇的な事が頻発に起こるわけではなく、日々の地道な努力と、チームワーク、ボランティア精神に支えられる山の診療所。体力の続く限り、これからも山岳医療に取り組みたいと、白杵准教授は笑顔で語りました。

HISHASHI USUKI
うすき ひさし
医学部附属病院手術部
消化器外科
准教授(病院教授) 医学博士
専門分野:消化器外科
(食道・胃・小腸・大腸の炎症性疾患および良性・悪性腫瘍)



医療関係者、ご子息(右)とともに北アルプス登山を楽しむ。



白杵准教授のエピソードをもとに作られた『サマーレスキュー』の台本。

標高2500m
山岳医療に励む
医師と学生の姿が
ドラマになった

歴史は未来の道しるべ

日 本は外交に弱く、よく言われます。しかし、私たちは日本がどのような国際環境の中でいかに外国と交渉してきたか、実はよく知らないのではないのでしょうか？

法学部の井上准教授の専門は日本外交史で、とくに1950〜70年代の日本の対中国政策から、戦後日本外交の歩みをとらえ直そうとしています。この時代は現代とも密接に関わっており、今、日中両国が大きく対立している尖閣諸島問題も、1970年代初頭にその起源をたどることができそうです。

「日中国交正常化前後の1970年代は、今まで非公開だった外交文書の公開が進み、最新の史料を見ることができるようで、引退された関係者がまだご健在なので直接お話をうかがえます。まさに今しかできない研究です。当時の日本を動かしたトップエリートが何を考え、どのように判断したかを知ることが、単なる歴史の研究にとどまらず、これからの日本の政治・外交・安全保障を考える上で大きな意味があります。」

集めた断片から時代の全体像を描き出す。歴史研究は探偵のような知的作業の連続です。各国の外交文書やデータベースから、井上准教授は、戦後日本外交にとって大きな出来事であった日中国交正常化の新たな分析を行い、著作『日中国交正常化の政治史』で2011年(平成23年)に第33回サントリー学芸賞(政治・経済部門)を受賞しました。

日本外交について、井上准教授は多面的な評価が必要であるといいます。「個々の局面では批判すべき点もありますが、結果として、日本はこの60年間戦争に巻き込まれることもなく、国民の生命と財産を失うこともなかった。それは弱腰に見えたとしても失敗ではなかったのだと思います。歴史を見れば、強気な外交を行った国が逆に孤立して失敗した例は多くあります。外交には、できること、とできないこと、がある、日米安全保障条約と憲法の制約の中で、平和と繁栄を選び取ってきた日本外交の道程は、きちんと評価されるべきでしょう。」

最近の日中関係について、井上准教授は、「毎日発信される洪水のようなメディアの情報を前に、雰囲気や空気に流され、自分で考えなくなるのが一番危ない」と考え、歴史の教訓から学ぶ大切さを強調します。日中関係は近すぎるために謙しも熱くなりやすいテーマですが、様々な意見が出てくるのは当然です。でも、どのような結論に至るにせよ自分で分析して答えを出すことが大切です。われわれ外交史研究者は、ニュースのように世界で起こっている最新の出来事を教えることはできません。しかし、情報をいかに取捨選択し解釈するかの方法を教えることができます。歴史から学ぶことは、最近流行の「即戦力」になる知識ではありませんが、先人の知恵に学ぶことで、ものごとを軸を身につけられる、それが外交史や国際関係を学ぶことの意味だと思えます。私のゼミでは、歴史の本や現代の国際政治に関する古典や定評のある著作を輪読しています。何事も基礎になるのは幅広い読書。まずはどんな本でもいいので、手取り次第好きな本を読んでもください。」

開かれていく史料と失われていく記憶を追いかけ、各地を飛び回る井上准教授。日本の外交史研究は、今がまさに旬です！

KEYWORD

【日本外交】

かつての日本外交史研究は、史料公開が制約されていたことから、米国の外交文書に基づいて書かれてきた。しかし、近年の情報公開制度の充実によって、日本の外交文書の公開は飛躍的に進み、日本政府内部から見た外交政策形成の詳細な分析が可能になってきている。新事実の発掘と共に、戦後の日本外交の歩みをとらえ直す作業がいま進められている。



受賞したサントリー学芸賞の盾と、著作『日中国交正常化の政治史』。



机の上には海外からの手紙や電報がどっさり。現在調査中の資料です。



井上正也

MASAYOSHI INOUE
いのうえ まさや
法学部
准教授 政治学博士
専門分野: 日本外交史
国際関係論

島の人のふれあいはい
些細だけれど力がある

古川尚幸

KEYWORD

小豆島SAKATE
プロジェクト・
直島プロジェクト

香川大学経済学部による
地域活性化プロジェクト。
2005年にスタートした直島
地域活性化プロジェクト(直島
プロジェクト)に加え、2011年
には新たに「小豆島SAKATE
プロジェクト」が発足。

NAOYUKI FURUKAWA

ふるかわ なおゆき
経済学部 経営システム学科
教授 工学博士
専門分野:商品学 環境問題
地域活性化



小豆島SAKATEプロジェクトの学生と地域の方と、
喫茶「白鳥」の前で記念撮影。



直島プロジェクトの商品開発グループは、お昼時間集まって
香川大学で会議中。

島と学生をつなぐカフェ

小豆島SAKATEプロジェクトメンバーと共に

3

月20日に開幕する「瀬戸内国際交
渉祭2013」は、2010年に続き2
回目となる芸術祭の祭典は、春・夏・秋の3シ
ーズに渡り12の島と2地域を舞台に開催され
ます。そのうちの3島で、経済学部の古川尚幸
教授(経営システム学科)と香川大学の学生たち
が、カフェを運営します。「小豆島と沙弥島の
カフェは、オープンへの準備が着々と進んで
います。古川教授「小豆島は、地元のみさんと
協力しながら、港町・坂手で長年にわたり
住民に親しまれてきた純喫茶を復活(小豆島
SAKATEプロジェクト)」。沙弥島は、瀬戸内
国際芸術祭実行委員会と打ち合わせを
しながら、構想を練っているところです。

一方、芸術祭でも核となる直島で、すでに成
功を取っているのが「和caféぐ」。古民
家を改装したくつろげる雰囲気のカフェは、
「香川大学直島地域活性化プロジェクト」で
行われ、間もなく開業から7年を迎えます。
「私の直島初上陸はかなり遅くて、2005年
でした。知人に、地域活性化を口指す島の団体
『いーぶーな』のメンバーを紹介して
もらって親しくなり、定期的に通うようになった
のです。その当時、島にはカフェが1軒しかなく、
休日になると、食事や休憩をとることができ
ない観光客が路地を彷徨っていました。ゼミ
後の休み時間に、何の気なしに学生たちに、そん
な状況を伝えたところ、何人か「私たちが
やりましょうよ」と言い出しました。」

「和caféぐ」の始まりは、こんな雑談から。
最初には資金もない机上の計画でしたが、カフェ
オープンのための調査費用として、経済学部
プロジェクトの援助金ももらえることになり、
俄然、現実味を帯びてきます。その後は、すべて
学生が主体で行動。店舗とメニューを探索し、
民家を見つけて改装、メニューを考案し、調理
やサービスの役割を決め、オープンを迎えます。
それから7年。人件費も出ないもの、ずっと

黒字経営が続いているんです。
「直島が上手にしているのは、学生が大学の
看板を背負って責任を持ってやってくれて
いるから。また、一緒にプロジェクトを動かして
くれる、地域活性化に熱心なパートナーがいた
から」と古川教授。これからオープンする小豆
島と沙弥島も、地元パートナーと手を取って
いけそうだからと出店を決めたそうです。

けれど、島との付き合い方については「未だ
に模索中」と続けます。各々の島がよりよく
なれば、と思うて活動していますが、すべての
方に喜んでいただく、というのは難しいです。
「島を活性化しているなんて傲慢な事は絶対
に言えない。今の付き合い方で本当にいいのか
と自問しながら関わることに意義があると思
っています。」

古川教授は坂出市の出身。故郷は好きではな
が、自分の住む地域について深く考察し始めた
のは、海外の魅力的な町に触れてからでした。
「在外研究でイギリスに滞在した際、休日に
車でヨーロッパの田舎町を巡りました。小さな
町にもたくさん立ち寄りしましたが、どの町も
広場に人が集まっていたので、香川
はどうだろうかと、戻ってから地域を見る目
が変わり、島にも行ってみようと思ったんです。
すっかり島好きになった古川教授にとって、
その魅力は地元を愛する地域の「人」は、観光
客たちは島のどこに惹かれるのでしょうか？」

「やっぱり彼らも、人なのではないでしょうか。
直島ならアートが人口かもしれない。各々の
島に豊かな文化があって、それを知ると、その
面白さ、けれど続けて来ているのは、島民とちゃんと
触れ合った人たちだと思います。みんなが挨拶
してくれた。歩いていたら車に乗せてくれた。
そんなふれあいは、此細なうでいて、人を強く
惹きつける、力のあるものだと思います。」
島と島に住む人にも出会えそうな瀬戸内
国際芸術祭。学生たちが頑張る3つのカフェ
も、ぜひ訪ねてみてください。